生徒の学習意欲の向上を図る教員の関わり方
－　内発的動機づけに着目して　－

学籍番号（219349）
氏　　名（植山和都）
主指導教員（上田裕美）
副指導教員（田中真秀）

１．背景

1.1 研究の背景

私の大学院入学当初の研究関心は生徒の学習意欲を向上させるために、どのような先生と生徒の関わり方が適切なものかである。先行研究において教育と動機づけは様々な面で関係があることがわかったが、具体的にどのような生徒との関わり方が望ましいのか、また具体的にどのような取り組みが行なわれているのか、についてより詳しく知りたいと考えた。

1.2 本研究の方法と目的

本研究では動機づけに関する調査から導いた学校の生徒の実態や特徴から、その学校で授業に対する動機づけを高められる授業や取り組みを提案することを目的としている。

研究方法は実習校の生徒を対象とし、動機づけに関しての質問紙や日常的なコミュニケーションを通してその実習校の生徒の特徴や実態を把握し、先生方の意見や考えを踏まえ実習校で取り組むことのできる勉強に対する内発的動機づけを高められるような授業を提案、実践する。

２．実習校の実態把握

2.1質問紙調査

実習校の生徒がどのように学習に向き合っているのかを把握するため、今回の質問紙調査を作成した。西村・河村・櫻井(2011)の自律的学習動機尺度を使用した質問紙を作成し、実習校の二年生の生徒を対象に実施した。それらを HAD を用いて最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。自律的学習動機尺度の因子分析を行なった結果、3　因子に分けられた。第 1 因子は「取り入れ的調整」、第 2 因子は「内的調整」、第 3 因子は「外的調整」と命名した。この調査を通して、生徒の特徴が見えてきた。テストや成績に関して関心が高く、内発的動機づけと勉強時間に正の相関が見られた。

2.2 先生方への聞き取り調査

実際に現場でいろんな工夫をしている先生達にお話を伺い、自身の取り組みに取り入れることで、内発的動機づけを高める授業の構想の質を向上させ、効果的なものになるだろうと考えた。さらに先生方が実習校の生徒についてどのように考えているのかを調べ、どれほど生徒の

考えが先生に伝わっているものなのか、そこにズレは生じているのか検証したいと考えた。

結果として、様々な意見を聞くことができた。その中で経験年数と考え方には少なからず関係があるのだろうと考えた。経験を積むにつれて、視野や考え方が広がっているように見てとれた。これは協力していただいた先生が4名と少数なため、偶然と捉えることもできる。生徒の学習のモチベーションについて質問紙調査の結果と比較したとき、若手教員のほうが的確な回答のようにみられる。他にも先生と生徒の考え方にはギャップが生じることが分かった。先生は長い目で目標を意識している反面、生徒は直近のテストや課題に焦点がいっているようにとれる。経験が増えるに従って、見方考え方が広がるためそういったことが起きるのだろうと考えた。

3. 内発的動機づけを高めるための授業実践

3.1 授業と評価

生徒の授業に対するモチベーションを高めることを目的とし、どの生徒も楽しめるような授業を計画した。大まかな流れとしては、まず活動の説明をし、その後班の形に席を動かして、宿題で作成した方程式に関する問題を班で共有、そして班毎に代表作を用意して模範解答を作成し、最後にいくつかの班が作品を発表するというものである。生徒の内発的動機づけを高めるため、生徒の興味関心の高い「テスト」を意識して、その対策プリントを作るための授業と位置づけ、先生方の聞き取り調査で注目した班活動を取り入れたというものである。

結果として、全体的に楽しかったと評価した生徒が大半を占めていた。生徒からの評価では代数を苦手だと答える生徒の方が点数が高く、反対に代数が好きで得意な生徒からの評価が低い傾向にあった。さらに授業の題材や活動内容が生徒を楽しませるという点で合っていたことは良かったが、学ぶ内容の意識づけがうまくいかなかった。自身の課題として授業の目標意識を高める必要を感じた。

4. まとめ

今回の実践課題研究では、生徒への質問紙調査や先生への聞き取り調査を行なうことで、実習校の生徒の実態の把握やそれに対する先生方の考えや工夫を見ることで、その内容から内発的動機づけを高めるための授業実践に取り組んだ。生徒の特徴から内発的動機づけに注目して、それに働きかける授業を展開することで学習に対するモチベーションを高めることに繋がると考え、授業展開の工夫や題材の工夫についてヒントを得られるだろうと先生方の聞き取り調査を行なった。その中で、経験年数から視野の広がりや考えの変化の仕方が見られた一方で生徒との考え方の違いも見えてきた。以上の点を参考に授業を実施し、生徒が楽しみながらも勉強に対するモチベーションが高まる授業を実施し、終始、活発に班で交流しながら授業が展開できた一方で反省点もあがってきた。

今回の実践課題研究を通して、生徒の動機づけに関する実態把握を活かした授業展開をすることで活発な生徒の活動を見ることができた。学校によってできる活動の幅や生徒の実態は異なるため、この授業実践の内容は一概に効果的であるとは言えないものの、この一連の流れは生徒に合った授業を展開し学習意欲に働きかける工夫につながったと感じ、今後の生徒との関わり方について考えることができた。